実践団体情報

記入日	2018 年 12 月 20 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
代表者名	校長　若松 悠紀子
プラン全体のタイトル	わくわく防災減災―逆転の発想で生徒を変え、生徒が地域を変える防災教育の提案ー
電話番号	０３－３４１６－１１５０
メールアドレス	
実践団体の説明	本校は、中高一貫の私立女子校であり、生徒数約 500 名。所在地は世田谷区（併設の小学校は目黒区）。2012 年から始めた宮城県での被災地ボランティア研修での学びがきっかけとなり、学校内及び地域での防災教育・防災活動に取り組み始めた。防災教育を学校の特色の一つと位置づけて、様々な活動を展開している。特に「東京にある私立の女子校」という特性を活かした防災教育の実践と災害時のトイレ問題の取り組みが特徴的である。防災を軸とした地域との連携も広げており、世田谷区と乳幼児と妊産婦を受け入れる「福祉避難所（母子）」の協定を結んでいる。
所属メンバー	（代表）校長：若松 悠紀子 （担当）教諭：京 百合子（生徒教育部防災係）
活動地域	東京都内（世田谷区を中心とした都内各地） 宮城県（石巻市・仙台市・東松島市・亘理町・山元町） 熊本県（熊本市・益城町）
活動開始時期・結成時期	活動開始時期：2012 年
過去の活動履歴・受賞歴	2015 年度／2016 年度学校防災力向上事業 （日本トイレ研究所・世田谷区のプロジェクトに協力） 2017 年度防災甲子園 フロンティア賞受賞 国土交通省「マンホールトイレ整備・運用のためのガイドライン」に事例として掲載（p.49，2018 年度版 p.50） 2017 年度ボランティア・スピリット・アワード コミュニティ賞受賞

プラン全体の概要	**◎実践報告の構成** 年間を通じて、校内外で様々な活動を展開しているため、本実践報告では、以下のような構成にまとめた。 A：授業（報告書数：３件／具体的活動数：３活動） B：訓練（３件／３活動） C：被災地での防災学習・支援活動（３件／４活動） D：災害時のトイレ問題（２件／11 活動） E：生徒による発信活動（１件／７活動） F：教職員研修（1 件／２活動） G：地域活動（１件／１活動） 本校の防災教育の方針は、「わくわく防災減災」であり、これはプラン全体に共通する合言葉にもなっている。すなわち、防災の取り組みにおいて、生徒に「わくわく感」を感じさせることで、目を背けがちな災害や防災に関心を向けさせ、一人一人の防災意識を高める工夫を行っている。 「災害は、いつ来るか分からない。どうにかして短期間で、目の前にいる生徒の防災意識を大きく変えたい」という願いから、本校の防災教育は始まった。 現在は、防災を「生徒たちが解決すべき社会課題」と位置づけることで、学力の３要素をバランスよく育てつつ、生徒自身の防災意識を高める試みを重ねている。最初は、「どうすれば良いのだろう」と呆然とすることも多々あったが、試行錯誤の中で、進むべき方向性が見えてきた。本プランでは、現場が抱える防災教育の課題（教員の本音）に対する解決策・ヒントを、教育に軸を置きながら、実践の中で提示することも目指している。 また、私立学校は公立学校に比べて地域との繋がりが薄いという課題を抱えている。防災を軸に地域との繋がりを作っていくことも、本プランの柱の一つである。

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
4 月	防災訓練・授業実践	行政と打ち合わせ	
5 月	防災訓練・被災地研修	被災地研修下見	防災学習（修学旅行・熊本）
6 月	防災訓練・授業実践 被災地研修	講師と打ち合わせ 授業作り	授業実践（社会）・防災訓練・防災アンケート・日赤中高生研修での発表
7 月	被災地研修 教職員対象研修	行政と打ち合わせ	14 回被災地ボランティア研修（宮城）・携帯トイレ作り
8 月	教職員対象研修・防災社会科見学・住民研修会	各活動の打ち合わせ 下見	防災イベント（携帯トイレ）・教職員対象の防災研修
9 月	住民研修会・防災イベント・復興支援イベント	チラシ作成・広報活動 授業作成	防災訓練・研修会講師・防災イベント開催
10 月	社会科見学・授業実践	打ち合わせ・授業作り	授業実践（社会）
11 月	社会科見学・地域防災訓練・教職員対象研修	打ち合わせ・資料作成 プレゼン準備	防災社会科見学 私学教職員対象の防災研修
12 月	防災訓練・防災研修会・被災地研修・授業実践	打ち合わせ･活動場所の検討及び予約手配・授業作り	地域防災訓練参加・母子避難所訓練の開催協力及び参加
1 月	授業実践 防災研修会	授業づくり 研修会内容検討	授業実践（教科横断的授業・留学生）・3.11 追悼イベントのための書道作品作成
2 月	被災地研修 住民研修会	打ち合わせ 被災地研修下見	「防災減災通信」作成 携帯トイレ作り
3 月	被災地研修 住民研修会	研修会準備	研修会講師・第 15 回被災地研修・「防災減災通信」発行

プラン全体の反省点・課題・感想	多くのプランを実践したため、時間が足りないこともあったが、新たな授業開発、地域連携の深まり、本校発の活動の社会的広がりなど多くの実りがあった。
今後の活動予定	これまでと同程度のスピードで防災教育を進める。同時並行で、実効性のある体制作りも目標にする。

記入日	2019 年 1 月 10 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	1 （A:授業実践①）
タイトル	普段の授業で防災力をつけよう！ ―学力の 3 要素を育む「防災化」授業の提案 （社会科での防災教育及び行政との協働防災授業）
実践担当者のお名前	京 百合子（社会科）

実践にかかった金額	3 万円未満
実践の準備にかかった時間	数日・1 週間・数週間
実践活動を実施した日時	(1) 通年（2018 年 4 月～2019 年 3 月） (2)「母子避難所について考えよう」の実施 2018 年 6 月 1 日～2018 年 6 月 30 日
実践の所要時間	(2) 授業数：約 7.5 時間（50 分×9 コマ） ※3 クラスで実施（計 27 コマ）
実践の運営側で動いた人の人数	1 人
防災教育の対象者の属性	中学生
防災教育の対象者の人数	95 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 中学 3 年 A 組～C 組教室・多目的室・マリアホール
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	区役所職員（熊本地震の際に派遣された職員、母子避難所の担当者）、産婦人科医（災害時の母子支援の専門家） 授業用プリント、プリント用ファイル、新聞記事や映像資料、世田谷区と学校の協定文書、建物見取り図（母子避難所になる予定の建物）、ワークシート、付箋

達成目標	本実践は、「防災教育をしたくても決められたカリキュラムがあり、時間がとれない」という教員の声に応え、教科書の単元に沿いながら、通常の社会科教科書内容の学習を深める教材として、防災教育を利用した授業を提案するものである。同時に、実社会と乖離しがちな社会科の

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">学習を実感を持って学ばせたり、社会に還元したりする授業づくりを目指している。
　具体的には、本校が協定を結ぶ「母子避難所」を題材に、生徒たちに実感を持ってルールや公正さについて考えさせ、実際に行政への提言も行った。他にも「情報化（災害時のデマ・情報収集）」「多文化共生（災害時の外国人への配慮）」「効率と公正（限られた食料の分け方）」などの単元の開発・実践も行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">（１）「防災化」授業の展開（一例）
以下の通り、社会科（公民的分野）の単元を防災の視点から学んだ。
「情報化」⇒災害時のデマと情報モラルから災害時に誤解を招かない情報発信を考える、支援物資のミスマッチを引き起こさない支援を議論する
「少子高齢化」⇒世田谷区の人口構成（乳幼児と妊産婦）を知る、災害時の妊産婦の問題や体験談に関心を持つ
「多文化共生」⇒災害時に外国人が直面する問題を資料を使って検討する、災害弱者への配慮と自分自身も当事者（災害弱者）になる可能性があることに気づく
「効率と公正」⇒限られた食料の分配方法を議論する、実際の建物見取り図を使って母子避難所の部屋割りを考える
「ルールをつくる」⇒母子避難所の協定書を基に契約を学習する
「需要と供給」⇒需要と供給を学ぶ際に、携帯トイレの価格を具体例として取り上げる
※尚、本校では、東京書籍『新しい社会　公民』を使用している。

（２）「防災化」授業の発展的展開
　社会科（公民的分野）の単元として防災教育を行った場合、「防災」よりも「公民」の目標を達成することに重点が置かれる。そのため本実践では、「防災化」授業と連動して講演会や行政への提案ミッションを行うことで、社会参画や防災教育としての質を高める工夫をした。</td></tr>
</table>

✎教科書「公民にチャレンジ⑩私たちの政治参加」の流れに沿うと…

問題把握（地域を振り返り、課題を調べる）

社会科（公民）における「防災化」授業（←ここまででもよい）

⇩　　※（２）の実践としては、【３コマ】

問題分析（行政職員に話を聞く）　**ゲスト講演会**【２コマ】

❶世田谷区災害対策課職員（6/1）：熊本地震支援の体験談と世田谷区の防災体制について

❷産婦人科医（6/14）：災害時の母子支援について

⇩

意思決定（自分たちにできることを考える）**「わくわくミッション！」**

【２コマ】「ミッション」について、チームで話し合い、３分間のプレゼンテーションにまとめる。生徒のやる気を上げるため、くじ引きでチームを決め、ミッションを選択制にした。

☆選択ミッション

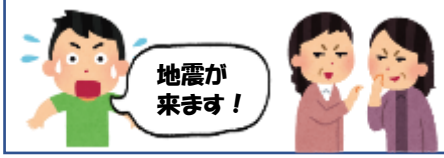
A「母子避難所の提案をしよう！」

B「未来の被災者へのプレゼンテーションを考えよう！」※１

⇩

提案・参加　**プレゼンテーション**【２コマ】

①クラスでプレゼンテーションを行い、代表チームを選んだ。

	②母子避難所を担当する部署や災害対策課の行政職員を招いて、代表の６チームからプレゼンテーションを行った。（6/30） ③生徒から出たアイディアを文書にまとめて区に提出した。 ※１）参考：**「未来の被災者へのプレゼンテーションを考えよう」** ①タイムマシンに乗ったあなたは、〇〇年〇月にタイムスリップしました。●●地震が起こる１か月前です。 ②被災することになる人に、地震が来ることを知らせたいと思いますが、あなたが未来人であることも、１か月後に地震が起こるという訴えも誰も信じてくれません。  ③地震の発生を止めることはできませんが、もしかしたら意識を変えることはできるかもしれないと考えたあなたは、妊婦さんや乳幼児を連れた人たちが集まる場所で、防災の話をすることにしました。 ④「未来の被災者」に向けたプレゼンテーションを考えてください。もらえる時間は、３分間です。
得られた成果	・どの生徒も意欲的に取り組んでいた。授業で学習した知識を活用することで理解と定着を図ることもできた。 ・今年度、各地で多くの災害が発生したが、災害発生時にどのようなデマが出回っていたかを調べて、話題にする様子が見られた。 **【生徒のアイディア・提案の例】**頁数の都合で多くは紹介できないが、授業での学びを土台とし、自由な発想で、様々なアイディアを出していた。プレゼンテーションでは、データを用いて説得力を高めたり、クイズ形式にして関心を持ってもらう工夫をしたりする様子が見られた。 **母子避難所の提案**：余震があって避難しなければならないかもしれないので、入り口に近い場所を動くのが大変な妊婦さんに充てる／子供の遊び場やおしゃべりできるスペースを作り、ストレスを貯めない配慮をする／各部屋に親しみの持てる名前を付ける／赤ちゃんが夜泣きしたときに使用できる部屋／外国人への配慮のアイディア、など。 ・「自分たち生徒に何が出来るか」という視点でも考えていた。 ・現在、実際の母子避難所のマニュアル作成が進められている。その中

	で生徒のアイディアも活用された。（実際の使用者の意見は貴重） ・区が主催する母子避難所の訓練が行われた際に、資料として生徒のアイディア一覧が配布され、参加者に好評であった。（12/17）	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・実践では、授業数をできるだけ抑えることを目標の１つにしていたため、プレゼンテーションの練習が十分にできなかった。 ・複数の視点を持たせることを心掛けている。例えば、「熊本地震の際に本校から携帯トイレを現地に送り、在宅避難者の役に立った」事例の一方、「支援物資のミスマッチ」が被災地の大きな負担になることを紹介する。千羽鶴や寄せ書きが困ったという声がある一方で、励みになったというケースもあることから、「どうすれば相手のためになる支援ができるか」を考える。「SNS を使ってメッセージを送る」「支援物資の箱にメッセージを書く」「時間が経って支援が減って来る時期まで待って送る」といった多様な意見が出された。	

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	教員（特に防災教育になかなか取り組めないと思っている先生）
伝えたい内容	普段の授業を進めつつ、生徒が生き生きと話し合い、そして何より生徒自身の防災意識も上がり、活用した知識も定着する。「防災化」授業はお薦めです。学校外の大人に、生徒のアイディアを真剣に、しかも「良いアイディアは実際に取り入れよう」という姿勢で聴いてもらうのに「防災」ほど、最適なテーマはありません。 防災教育は、生徒を成長させるチャンスです。「限られた時間数で防災教育ができない」「防災の知識が無いから防災教育ができない」と思い込まず、「わくわく防災視点」で見てみると、たくさんのアイディアがあるはずです。希望を持って、防災と向き合うと不思議とアイディアが湧いてきます。わくわく取り組んでいきましょう！

記入日	2019 年 1 月 10 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	2 （A:授業実践②）
タイトル	逆転の発想！！生徒「が」防災を教える防災教育 （中学 1 年生・防災社会科見学）
実践担当者のお名前	関根 美沙（中学 1 年主任・社会科）・京 百合子（社会科）

実践にかかった金額	30 万円未満（主に交通費）
実践の準備にかかった時間	数日
実践活動を実施した日時	(1)授業・プレゼンテーション準備： 2018 年 10 月 4 日～2018 年 11 月 16 日 (2)社会科見学当日： 2018 年 11 月 16 日 10 時 00 分～15 時 30 分
実践の所要時間	(1)約 6.5 時間（50 分授業×８コマ） (2)5 時間 30 分 ※(1)は３クラスで実施→合計 20 時間
実践の運営側で動いた人の人数	10 人（教員 6 人・防災科学技術研究所４人）
防災教育の対象者の属性	中学生
防災教育の対象者の人数	約 70 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区・茨城県つくば市
実践を行った具体的な場所	(1)目黒星美学園中学高等学校 1 年Ａ組～Ｃ組 (2)防災科学技術研究所
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・生徒の発表を聞いてくださる専門家（防災科研） ・授業用（プリント・パワーポイント、映像資料） ・文具（模造紙・付箋・プロッキー・コピー用紙） ・見学地までの交通手段（大型バス 2 台借り上げ）

達成目標	**【実践の達成目標】** 入学後、初めて防災の授業を受ける中１が、防災に関するアイディア・提案を自ら考え、社会科見学で専門家の前で発表する。その中で、防災に対する生徒自身の抵抗感を無くすこと、及びコミュニケーション能力の向上を目指す。限られた授業時間数で実践を行い、効果を上げる。

【実践を通じて達成したい目標】

◆防災教育の初期の段階で、生徒の意識を転換することを目指した。

①防災は「大人から教えてもらうもの」「誰かにやってもらうもの」ではなく、「自分で考えるもの」「私自身が行動するもの」と捉える。

②生徒が持つ防災に対するマイナスのイメージや抵抗感を取り払う。

③様々な視点を取り上げることで、「１つの答えを覚える」ではなく、「多様な防災選択肢を持つことが大切」という認識を持つ。

④自らの考えを発信する面白さを経験し、学びの意義を見出す。

★「生徒が教える防災教育」とは？★

多くの生徒は防災に対して「マイナス」のイメージを抱いている。

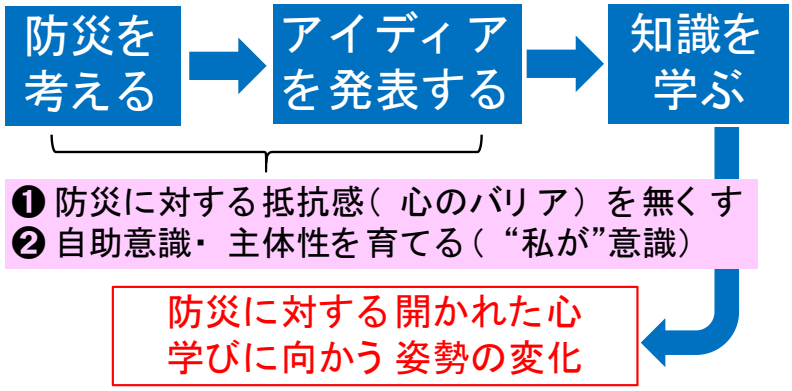
（特に「防災」と「災害」を同一視しているケースが多い。）

✎生徒が最初に書き出した「『防災』と聞いて感じる気持ち」

怖い、面倒くさい、つまらない、後回し、不安、悲しい気持ち、
つらい時間、やらなきゃいけないけどよく分からない、
防災＝災害というイメージが強いのであまり嬉しくない

このような気持ちを持つ生徒が対象の場合、防災を教える前に、まずは防災に対する「プラスの感情」を持たせることが効果的である。このような発想の転換（「逆転の防災教育」）を、実践を通じて提案する。

⇨「逆転の防災教育」の流れとその効果



生徒自身の防災への抵抗感を無くすには、最初に「考える」経験をさせることが有用である。特に効果的なのが、「生徒自身が防災について考え、大人に教える」という経験である。

<table>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">

①授業・プレゼンテーション準備（社会・LHR）

計8コマ
❶2コマ：授業（防災を考えるヒント＆視点を変える）
❷1コマ：防災科学技術研究所の研究員による講演会
❸5コマ：チーム活動＆クラス内発表

・この他、国語で「プレゼンテーション」の授業を1コマ行った。
・キャリア教育の一環で、東北の支援活動を続けている「企業」の担当者による講演会も行った。（実施日時：11/10 10:00～11:15）

❶授業（※具体的な授業の流れについては、別紙資料参照）
✎1コマ目：そのとき、避難できますか？
✎2コマ目：本当に避難所に入れるの？沢山の防災選択肢を持とう！

★授業成功のコツ★ 授業者は「生徒を教える」という意識ではなく、「一緒に考える、考えるヒントを与える」という意識、「生徒の意見を聞きたい」という姿勢を持ち、楽しそうに授業を展開する。

❷防災科学技術研究所研究員による講演会（10/16 15:15～16:05）
講演の中で、「女子中学生視点で考えてほしいミッション」が発表された。「研究者も困っている課題」であるという点を強調すると、生徒の中で、取り組みへの責任感とモチベーションが飛躍的に高まった。

ミッション1：防災に関心を持ってくれる人がなかなか増えなくて困っています。どうすれば女子中高生も防災を「自分のこと」と考えて防災活動に参加してくれるようになるでしょうか？
　例えば、「女子中学生も参加したくなる防災訓練」など楽しく魅力的でみんなが参加したくなる防災の提案をしてください。

ミッション2：なかなかみんな避難してくれなくて困っています。どうすれば、「これまで大きな災害は起きてないし、どうせまた大丈夫」「まさか自分が被災するわけない」と思っている人を、早い段階で避難させることができるでしょうか。

</td></tr>
</table>

「避難するのが当たり前」「ぜひ避難しよう！」とみんなが思うようになるための面白いアイディアをぜひ教えてください。

★質疑応答にお薦め―質問を引き出す「ざわざわタイム」★

質問が出ないことが多いため、次のような「ざわざわタイム」を取るようにしている。♤近くの人と話し合い、必ず３つ質問を考えるように指示する。→講師の方にランダムに番号を言ってもらう。

→該当する出席番号の生徒が質問をする。（結構、盛り上がる。）

❸チーム活動＆クラス内発表

【チーム活動の方法】(1)３～４名でチームを作る（各クラス６チーム）

(2)付箋にアイディアを書き出し、「わくわくワークシート」に貼る

(3)アイディアを選び、３～５分のプレゼンテーションにまとめる

(4)クラス内で発表し、各クラス２チームを代表として選出

♧**「わくわくワークシート」の内容と目的**

《１》防災に関心のない人や避難しない人の本音を書き出そう

⇒☆目的：ブレーンストーミング、課題の客観化

《２》「人を動かす」アイディアを考えよう！

⇒☆目的：「防災」を通じて、課題解決型学習を体験

《３》アイディアを仕分けしよう（アイディア・ランキング）

⇒☆目的：安易なアイディアを除き、ユニークなアイディアを見出す

⇦**ワークシート《３》の例**

代表チームに選ばれようと、できるだけユニークなアイディアを考える競争心も生まれていた。

作業の中で、教員が「本当は教えたいこと」をアドバイスの形で生徒に与えると良く吸収する。

②社会科見学当日（活動の詳細は、防災科学技術研究所 HP で紹介）

■自然災害情報の利活用に基づく災害対策に関する研究プロジェクト「女子中学生の視点から防災対策を考えるワークショップの開催」
https://risk.ecom-plat.jp/?module=blog&eid=10483&aid=22271

	10:00～11:30 施設見学→11:30～11:20 Dr.ナダレンジャーショー →13:00～14:00 専門家に提案しよう！（生徒プレゼンテーション） **発表テーマ**：A組「避難所マラソン」「一人一人ができる防災」 B組「インスタ映えする防災グッズ」「イケメン防災キャラクター」 C組「大人も子供もフレンド Festival（防災イベント）」 「非常食をもっと身近に！非常食体験デー」 →14:00～15:15 ワークショップ（＋防災科研の防災訓練に参加） 発表後に、参加者全員で小グループに分かれて、専門家の方を交えて、発表アイディアをより良くするための方法をディスカッションした。
得られた成果	・防災のイメージアップに成功した。楽しく防災について考え、体験する中で、生徒が防災に関して、主体的に関心を持つようになった。 ・災害のメカニズムについても関心を持つ生徒が増えた。 ☆**生徒の感想文より一部抜粋**：◆災害について知ることや防災についての良くない先入観を持たず、楽しく体験することの大切さを学びました。自分からも積極的に災害について学んで行きたいです。◆防災はみんなで行うものです。一人ひとりが協力するから、いざというときに助け合っていけるということを忘れずに過ごしていきたいです。◆私は大人になっても防災の大切さを忘れずに生きていきたいと思います。そしてまた大人の方にプレゼンをする機会があればやってみたいなと思いました。◆防災の大切さを子供から大人まで様々な世代に発信していきたいです。◆私は、最初防災はつまんないと思っていました。でも、班で色々な案を出し合った時はとても楽しかったです。

どのくらい身につきましたか？		
	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

課題・苦労・工夫	・工夫としては、学校外の協力者の方に、教育方針（＝生徒自身の学びのために、大人が「教えよう」ではなく、「生徒のアイディアを聞きたい」という姿勢を持つこと）へのご理解とご協力をお願いする。

記入日	2019 年 1 月 17 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	3 （A:授業実践③）
タイトル	コラボ授業で、防災を学ぼう！ （教科横断的授業の企画と実践）
実践担当者のお名前	清水 真弓（理科科）・京 百合子（社会科）

実践にかかった金額	1000 円未満
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2018 年 1 月～2 月
実践の所要時間	約 1.5 時間（50 分×2 コマ）
実践の運営側で動いた人の人数	3 人
防災教育の対象者の属性	中学生
防災教育の対象者の人数	75 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校職員室・理科室
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・各教科の教員 ・実験器具・砂・ビニール袋・墨汁・小麦粉

達成目標	学校現場では、地域の特性に応じた防災教育が行われている。これは裏返すと、その地域で身近ではない災害に対しては、教育や訓練があまり行われていないということである。本実践では、教科横断的授業により、生徒が災害について「頭と心で学ぶ」ことを目指す。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	**実践内容：** 本校にとっては、比較的身近ではない「火山」について理科の授業で噴火実験を行い、社会の授業で別の角度（詳細は、実践方法参照）から火山・噴火について学ぶことで、生徒の知識と関心を高めることを目指す。 **実践方法：** ①理科： ・理科科の教員の指導で、噴火実験を行う。 ・実験のまとめとして理科科教員から噴火の違いについて解説する。 ・授業のまとめとして、社会科の教員が映像を使って、過去に起きた噴火をいくつか紹介する。 ②社会： ・御嶽山の噴火について取り上げ、生徒と同じくらいの年齢の子どもも犠牲になったことを紹介する。 ・犠牲になった方のご遺族の「写真を撮らずに逃げて欲しかった」というコメントが載っている記事を読む。 ・同時に、火山があるからこそのメリットにも気づかせる。 ⇒登山をする人に向けた「啓発ポスター」を作成する。 ⇒本当の目的は、「生徒自身が将来、火山と関わることになったときに、今回の学びを思い出して、活用すること」である。 レポート課題： 理科の実験報告と共に、以下のような課題を課す。 （１）「今回の理科と社会のコラボ授業を通して学んだこと」 「新聞記事を読んだ感想」「火山があるからこそのメリット（良い点）」 →この３つのテーマを必ず含めよう。 ②新聞記事を読んで、噴火の危険性について知らない人たちに、気をつけてほしいこと（火山の噴火に関して）について知らせるポスターを考えよう。

得られた成果	未実施	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	未実施
	思考力・判断力・表現力	未実施
	学びに向かう力・人間性	未実施
課題・苦労・工夫	・理科の授業に社会科の教員が白衣を着て参加すると、生徒は面白がり、より生徒の関心を惹くことができる。	

記入日	2018 年 12 月 21 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	４（B:訓練①）
タイトル	リニューアル防災訓練！パターン分けでマンネリ化を打破＆生徒を真面目に参加させるコツ（全校防災・避難訓練）
実践担当者のお名前	小林 由季・本間 裕規・京 百合子（生徒教育部防災係）

実践にかかった金額	ほぼ 0 円
実践の準備にかかった時間	1 日
実践活動を実施した日時	(1) 2018 年 6 月 19 日 14 時 30 分～16 時 30 分 (2) 2018 年 9 月 4 日 9 時 30 分～9 時 40 分
実践の所要時間	(1) 2 時間　(2) 10 分
実践の運営側で動いた人の人数	(1) 12 人（教員 3 ・生徒 6 ・消防署員 3 人）(2) 1 人
防災教育の対象者の属性	中学生・高校生・教職員
防災教育の対象者の人数	約 550 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 各教室・調理室前・体育館・スクールバス（校庭に待機）
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	消防署署員、緊急地震速報（訓練用）、病人・けが人カード、校舎見回りカード、ダンボール（炎作り）、マジック、スクールバス、スクールバス訓練用ＣＤ、消火器（行政からの貸し出し）

達成目標	本実践では、「どう行動すべきか」「なぜ避難するのか」を生徒も教職員も「考える訓練」にすることを目標とした。従来の訓練は、「合図があったら机の下にもぐってから避難」というパターン通り動くだけで、「考える」ということが少ないのが課題であった。「考える作業の無いパターン化」が、実際に地震が発生した際に、揺れている最中に机を探してウロウロする、慌てて飛び出すといった行動に繋がるのではないかと考えた。また、学校の防災訓練の在り方が、避難の必要性の有無を考えずに「地震が起きたら避難所へ行く」という刷り込みにも繋がると考えた。

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">教員向けの防災研修会等で、「生徒が防災訓練に真面目に参加しない」という悩みを聞くことがしばしばある。多くの現場が抱えるこの悩みのヒントになる取り組みを目指した。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">
（１）事前準備
①消防との打ち合わせ（6/14）：例年、電話での依頼・打ち合わせであったが、今回は、消防署を直接訪れて打ち合わせを行った。消防署員に訓練の流れを説明し、アドバイスを受けた。他校の事例や地域の取り組み等の情報を得ることもできて、有意義であった。

②全校朝礼で心構えを話す（6/16）
◆生徒を真面目に参加させる話のポイント・工夫
❶開口一番、「いよいよこの日がやって来ました！」と明るく宣言し、真剣に取り組まない場合は、容赦なくやり直しするということも笑顔で告げる。
⇒「特別な日が来た」（少なくとも先生はとても張り切っている）という意識と「やり直しは本気だ」という危機感を持たせる。
❷本来は、いつどこにいるときに災害に遭うか分からないので、その場で取るべき行動を一人一人が自分で「考える」ように話す。
⇒教員と生徒間で、「先生は皆さんを助けま…」「せん！」のやり取りを行う。（＝本校で生徒の自助意識を高めるために、敢えて行ってる生徒―教員間のお馴染みのやり取り）
・パターン分けした訓練を行うことを説明。初めてのため、敢えて詳しく説明し、帰りのホームルームで、流れのプリントを配布した。
・震源が近いと緊急地震速報が鳴らない可能性が高いことも確認する。
（２）訓練当日（6/17）
◆事前準備
・調理室前に段ボール炎を設置する（防災係以外には場所を伏せる）
・「けが人」「病人」と症状を書いた用紙を担当の生徒に渡しておく
①消防職員による講話・おんぶ紐の使い方確認（14:30～14:45）
</td></tr>
</table>

②**地震発生時の訓練及び避難訓練**（14:55～15:50･･･②～⑧）

★パターン１：軽度な地震が発生

緊急地震速報の 30 秒後に地震が来る設定→（30 秒の間に飛んできそうな物があれば、無理のない範囲で床に降ろす）→各自で身を守る姿勢を取る（放送は無し）→授業再開の放送

★パターン２：強い揺れが発生

❶緊急地震速報が鳴る→各自で身を守る姿勢を取る（放送は無し）

❷教員による見回りと報告（職員室にいる教員で「役割カード」を基に役割分担し、見落としがないようにする）

❸各教室では「けが人」「病人」などが発生

→担当の生徒は、無言で「けが人」「病人」カードを机の上に置き、周囲の生徒が教員に報告する。

！！！一旦、地震発生の訓練終了の放送を入れて切り替え！！！

放送：これで地震発生時の訓練を終了します。
続いて、火災や不審者侵入による避難訓練に移ります。

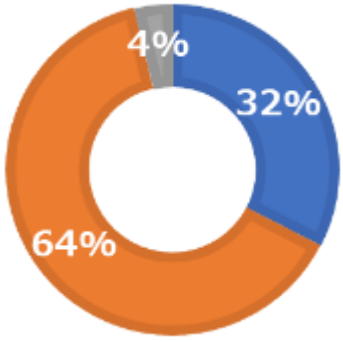
今回は、晴天でも雨天でも「体育館に避難」とした。「どこにいても、一人一人が考えて、真剣に避難できるようにする訓練」と位置付けて、割り切った。また、校庭が地割れ等で避難できないケースも考えられる。生徒には「あくまでも『避難する』訓練。体育館は天井が落ちるかもしれないし、入り口も少ないので、実際は避難先としてふさわしくない可能性がある」ということも強く伝える。

★パターン３：火災が発生（今回は、調理室）

・教職員は、消火器を持ち、火災現場へ行き、消火活動を行う。
・火災発生と避難指示の放送を入れる。
・防災係の生徒が、避難する生徒の取り組みの様子をチェックする。

③**やり直し判定**（防災係生徒・教員）→今年度は、やり直し無し（ただし、若干のおしゃべりは見受けられたという報告があった。）📷写真右

④**振り返り・講評**（防災係教員・消防署職員）

	・敢えて教職員側の失敗も生徒に報告した。 **⑤個別訓練：消火器訓練／スクールバス訓練** スクールバスに乗車しているときに災害が起きた場合の行動を確認した。 （名簿チェック、バス備蓄品の確認、非常口の開け方の説明等） **⑦体育館での地震発生時の行動確認→退場** **（３）事後振り返り**（クラウドサービスのアンケート機能を利用）
得られた成果	事後振り返りとして、「アンケート」と「防災意識尺度」を実施 ⇒初めて全校規模で防災意識を数値化・可視化できた。 **問．防災訓練全体を振り返って、自分自身の行動を評価してください。** ⇒９割以上の生徒が「よくできた」「できた」と自己評価 よくできた　141 人（32%：グラフ青） できた　276 人（64%：橙） ややできなかった　16 人（4%：灰色） できなかった　0 人（0%） ※当日参加した生徒のみの回答。尚、アンケート機能を初めて使ったこともあり、一部の生徒（20 名程度）の回答が集められなかった。  **問．防災訓練の感想や普段、防災減災について考えていることを自由に書いてください。** ◆高校生なので大人に頼らず、むしろ大人に頼られるような防災意識を持ちたいと思った。普段から災害対策のために備えているので、自分だけではなく親とも防災意識を高めていけたらと思う。 ◆いつもとは違って体育館集合だったにも関わらず静かでとてもよかったと思います。ですが、自分に足りないのはただ行列を作って避難する力ではなく自分の考えで最善の行動をとる力だと思います。も

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">っと対応力の高い人になれるように普段から災害を想定して行動できたら、防災減災にもつながると思います。
◆年を重ねるとともに防災訓練のレベルがあがって、生徒の気持ちも防災に向いてきていると感じます。災害が起こる前の備え、起こった際に撮る行動、避難所での生活とその後などに分けて、女性はどのような役割を果たしていくことができるかを意識化する女子校ならでは取り組みを含めた防災訓練が出来るといいなと思います。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">①初めてのチャレンジで企画に時間がかかり、防災係以外の教職員との情報共有が遅くなった。そのため事前の共通認識が持てなかった部分があり、初動訓練では様々な混乱が生じた。
⇒8/30 の教職員対象防災研修で再度、初動訓練を行った。
⇒実際の地震（震度３）が発生した際に、訓練通り動くことができた。
②リハーサルをしたものの、放送器具の不具合（音量が小さいなど）が起こり、指示出しがうまく伝わらなかった。
⇒教員側の失敗を敢えて生徒に伝える、「先生にやってもらう」「先生についていけばいい」という受け身の意識を取り払うきっかけにした。
③生徒から、以下のような指摘・提案も複数あった。生徒一人一人が考えて訓練に参加し、反省も含めて振り返っている様子が見られた。
⇒生徒の意見を取り入れながら、抜き打ち訓練も、ぜひ実施したい。
◆今回の防災訓練が上手くいったように見えたのは、あまりに事前に分かっている情報が多すぎたからではないかと思います。何時に地震が起きて、誰が怪我をするなどは本番分かっているわけがないし、今回は心構えができすぎた状態での訓練だったと思うので、もう少し事前に知らされる情報が少ない状態でやったほうが良いのではないかと感じました。</td></tr>
</table>

記入日	2019 年 1 月 17 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	５（B:訓練②）
タイトル	知らないは無力！大切な人を、家族を、命を守るための技術と心を磨こう！（生徒対象救命講習）
実践担当者のお名前	小林 由季（養護教諭）

実践にかかった金額	1000 円未満
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2018 年 9 月 3 日 12 時 30 分～15 時 30 分
実践の所要時間	３時間
実践の運営側で動いた人の人数	３人
防災教育の対象者の属性	中学生・高校生
防災教育の対象者の人数	31 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校多目的室
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・指導員（消防署に派遣を依頼） ・テキストブック＆マウスピース（参加者が購入） ・レサシアン人形　・AED　・鉛筆

達成目標	①心肺蘇生、人工呼吸、AED の使用方法、応急処置について理解し、技術をみにつけることができる。 ②傷病者対応は、救急隊や医師が行うだけではなく、第一段階としてバイスタンダーが行う応急手当が重要だということを理解する。 ③自分と他者を大切にする、守る術を身につける。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	**実践内容：**成城消防署員１名、東京防災救急協会３名、１名の指導の下、普通救命講習テキスト（ガイドライン２０１５対応）に基づき、レサシアン人形・ＡＥＤを使用した心肺蘇生、人工呼吸の演習実施。 **実践方法：** **①４月上旬：**成城消防署に普通救命講習を依頼。電話で実施希望日と実施可能かどうかを確認後、「救命講習依頼書」を FAX にて消防署へ送付。（日時を押さえる） **②６月下旬～７月上旬：**中１～高３の参加希望者を募り、人数が確定したところで消防署へ報告。 **③当日：** ・実施約１～２時間前に用務員に人形や AED などの必要物品を消防署へ車で取りに行ってもらう。 ・約１時間前に消防署員・東京防災救急協会・消防団の方が到着するため、会場に案内をする。 ・会場に来た生徒たちに、「救命講習・応急手当普及員講習受講申請書」を記入させる。 ※申請書記入のための鉛筆は学校で用意。申請書は、記入に少し時間がかかるため、人形を受け取る際等、事前にもらっておくとスムーズに講習が始められる。記入見本を拡大コピーしておくと良い。 ・終了後は、生徒たちも一緒に片付け。 ・今年度より、感想をクラウドサービスのアンケート機能を通じて、提出させた。⇒**結果は、「得られた成果」** **④１～２ヵ月後**、消防署から連絡がきたら、受講者全員の「救命技能認定書」を取りに消防署へ行き、個人へ渡す。

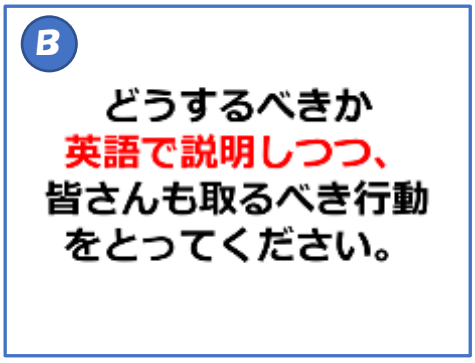
得られた成果	・生徒が防災意識を高めながら、実践的スキルを身に着けることができた。 **問１．今回、救命講習に参加しようと思った理由を書いてください。** ・私は前、心停止の人に蘇生を行った事がありました。その時も胸骨圧迫や AED の使い方は知っていましたが、混乱してしまって落ち着いて蘇生を行えませんでした。その時大人に蘇生を変わってもらった時、私は何も出来なかったという思いでいっぱいでした。そのためいざという時に落ち着いて行動できるように、救命講習や蘇生方などを覚えて出来るようにしたいと思いました。そのため今回の救命講習に参加しました。 ・私は看護師という職業に興味を持っていて、まずは今回の救命講習に参加して、医療や保健のことに触れて、学んでいきたいと思ったからです。 ・最近災害が多いから、もし自分の身の回りで何かあったら自分から率先して対応ができるようにするため。 ・非常時に知識が無いのとあるのとでは対応に大きな差がでると思ったので参加しました。 ・授業だけじゃなくて、AED や応急処置などもっと詳しく知りたかったし、いざという時に対処出来るようにするため。 ・もしもの時に自分から行動できるように。 ・先日駅で人が倒れる場面に遭遇し、AED などを使用した。災害が数多く発生する社会にあって、より詳しく救命について知っておく必要があると感じられたから。 **問２．今回の救命講習で学んだこと、今後に生かしたいこと等を自由に書いてください。また、講習中には聞けなかった疑問点などもあれば書いてください。** ・心臓マッサージを少しでもやめると脳死につながってしまうことを学んだ。倒れた人を見つけたとき、また家族が倒れてしまったときは率先して「私できます！」と言えるようになりたい。 ・普段生活している中でいつ起こるか分からないことのために、しっかりと正しい知識を身につけておくことで人の命を助けることも

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">出来るのだと思いました。
・今後も定期的に講習を受けて、忘れないようにしたい。
・各対処法で人の命が救えるのはすごいと思うと共に知らないと怖いと思った。率先して助ける意思を持つことを忘れないようにしたい。
・救命が少しでも早ければ助かったはずだった人が 0 になるように、私も身近な人に今回の講習の内容を教えてあげようと思います。また、災害時などでも今回の研修で学んだことを生かし、誰かの命を助ける勇気を持ちたいと思いました。
・倒れている人を多く助けることに繋がるといいなと思ってます。大切な人の命を救えるということに対して、救急講習の学びは一生忘れないようにしていきたいです。また、他にも学ぶことがあったら、刻み付けていきたいです。
・最近は自然災害も多いので、その時に止血法だったり、今回学んだ処置方法で自分も守りながら、周りの人にも出来るようにしたいです。
・実際にその場で教わることで、自分の誤って理解していた点を修正することができた。
・AED の正しい使い方や、生死にかかわる現場に遭遇した時のとるべき行動についてしっかりと学ぶことができたので、良かったです。今回習ったことを少しでも生かせたら良いと思いました。段階を踏んで、上級者向けの講習にも参加してみたいと思いました。普段の生活の中で再びそのようなことに遭遇した時に、今回学んだことを忘れず、人を救えるようになりたいと思います。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">・生徒たちが、どのような目的で救命講習に参加をするのか、どのようなことが知りたいのかを事前に確認しておくと、消防署の方たちに質問も出来て、より有意義な時間になると感じた。</td></tr>
</table>

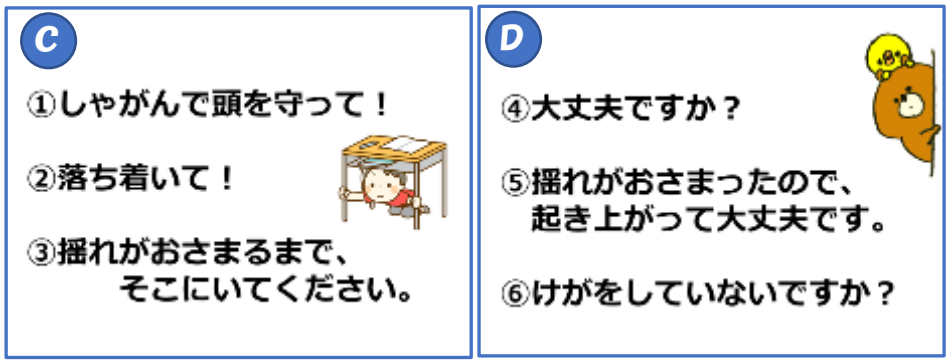
記入日	2018 年 1 月 18 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	６（B:訓練③）
タイトル	留学生と一緒に BOSAI！ （外国人が身近にいる状態での抜き打ちミニ訓練）
実践担当者のお名前	京 百合子（社会科）

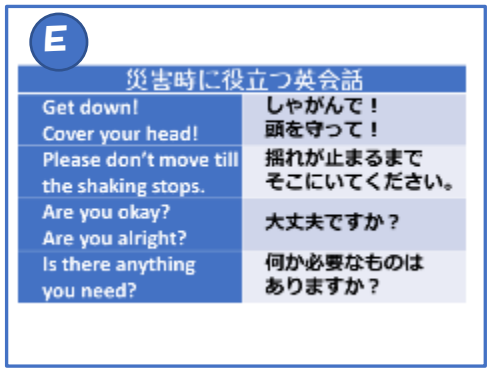
実践にかかった金額	ほぼ 0 円
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2018 年 1 月 18 日・1 月 22 日
実践の所要時間	50 分授業の中の５～10 分程度（３クラスで実施）
実践の運営側で動いた人の人数	２人
防災教育の対象者の属性	中学生・外国人留学生
防災教育の対象者の人数	97 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校３年Ａ組～Ｃ組
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・外国人留学生（本実践では、オーストラリア人） ・緊急地震速報の音源・授業用パワーポイント

達成目標	本実践は、外国人留学生を授業に招いて、本校生徒と留学生が相互に防災について学ぶことを目的としている。具体的には、通常の授業の中で、緊急地震速報を利用した訓練を実施する。 体験を通して、日本語のできない外国人に対する、声がけを含めた配慮について考えるきっかけにする。抜き打ちで実施することから、実際の発災時にも役立つ経験になると考える。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	かなり

実践内容・方法	**実践内容：** ・本校は例年 1 月にオーストラリアの姉妹校からの短期留学生を受け入れている。通常の授業（留学生を招いてオーストラリアについて紹介する授業）の最後に、以下の流れで緊急地震速報を用いた「抜き打ち訓練」を実施する。 ・阪神淡路大震災のメモリアルデーである 1 月 17 日前後の授業で実施することで、より意識づけになる。 **実践方法―授業の流れとスライド** **準備：**留学生には、事前に、「授業中に地震が発生した時の訓練を行う」ことと、「生徒が英語で皆さんに指示を頑張って出すので、言われた通りに動いてほしい」という旨を伝えておく。 **授業：**中 3 公民的分野の授業で実施　　**↓教員の動き** ⓪通常の授業を進める ①授業の最後の方に、**スライド A** を写して、話を切り替える。 当時の写真を数枚見せる。 ←1/18 用のスライド  ②**スライド B** に切り替え、予告なしに突然、「緊急地震速報」の音源を鳴らす。 ③**スライド C** に切り替える前に、少し時間を置く。 この間、生徒は、身を守る体勢（机の下にもぐる）を取りつつ、知っている英語を使って留学生に指示を出す。

④**スライドC・スライドD**のメッセージを、英語で留学生に伝えるように指示する。





⑤**スライドE**を写す。

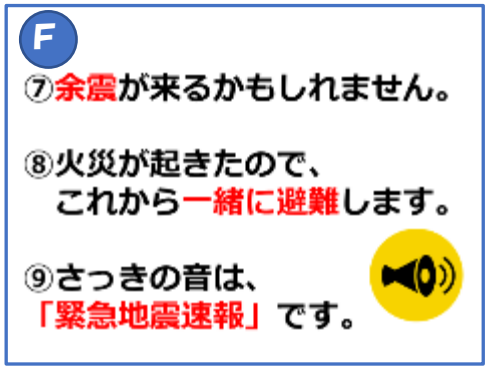
＊生徒の反応：

「あー！なるほど！」

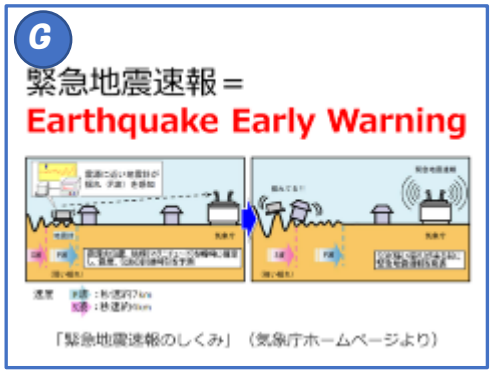
「これなら知ってた！」

「案外、簡単な答えだった」

留学生に発音してもらい、練習する。



⑥**スライドF**では、特に「余震」「一緒に避難」「緊急地震速報」を英語で何と表現するかを考えさせる。



⑦**スライドG**で、答えを紹介して、留学生に発音を教わる。

★まとめとして、災害が発生した時の外国人への配慮について話す。特に、緊急地震速報を知らない外国人がいたら、積極的に声がけするように促す。

	（３）「防災化」授業×オーストラリア留学生 公民的分野の「環境問題」「多文化共生」の単元や、地理的分野の「オセアニア州」の学習と連動しても良い。 ①地震が多発する日本に対して、オーストラリアはほとんど地震がない。なぜ少ないのかも確認する。 →教科書や地図帳で確認する（造山帯、プレートなど関連する所） ＊生徒の反応：「いいな～」「移住したい」 ②留学生から、「乾燥大陸」と呼ばれるオーストラリアでは、「山火事が日常的に多発すること」や「記録的な猛暑になっていること」を留学生から話してもらう。 ＊留学生：「学校から燃えているのが見えることもあります。」 ＊生徒：「え！そうなの！？怖い！」 ③たとえ「地震がない地域」であっても、それぞれの地域に応じた災害が発生することを指摘する。 ④日本だけではなく、外国にいるときに災害に遭う可能性があることに気づき、どのような心構えや備え、情報が必要かを考えさせる。 （その場で、オーストラリアの安全情報を実際にインターネットで調べても効果的。）
得られた成果	・短時間で、効果的な訓練ができた。生徒も関心を持ち取り組んだ。 ・英語で学習した知識を活用することができた。同時に、とっさの時に表現が思いつかないものだ、ということに気づいたのも貴重な経験になった。 ・外国人への配慮と共に、自分自身が外国で被災する可能性があることも気づくことができた。旅行等で海外に行く時に「楽しむために、危機管理をしっかりする」という意識を持つことができた。 ・阪神淡路大震災を知る機会になった。阪神淡路大震災は、生徒にとっては、生まれる前の出来事のため、あまり詳しく知らないという現状がある。
どのくらい身につきましたか？	知識・技能：かなり 思考力・判断力・表現力：かなり 学びに向かう力・人間性：かなり
課題・苦労・工夫	・準備時間が限られていたため、社会科単独で実施したが、英語科と連

	携できると尚、良かった。 ・生徒が恥ずかしがって、なかなか声がけができないクラスもある。そのこと自体を「災害現場でも起こり得る課題」として取り上げるのも良い。 ・今後は、留学生を対象とした防災の授業を開発・実践したい。

記入日	2018 年 12 月 15 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	7（C:被災地訪問・支援①）
タイトル	生徒が参加したくなる被災地での防災学習の工夫 （第 14・15 回被災地ボランティア研修 in 宮城県）
実践担当者のお名前	(1)頭島 美恵子・京 百合子（被災地ボランティア研修係） 市橋 朋之（第 14 回引率者） (2)京 百合子・他引率者数名

実践にかかった金額	300 万円未満（2 回の合計）
実践の準備にかかった時間	数日（1 回あたり）
実践活動を実施した日時	(1)2018 年 7 月 20 日～2018 年 7 月 22 日 （事前事後活動：2018 年 6 月～9 月） (2)2018 年 3 月 23 日～2018 年 3 月 25 日 （事前事後活動：2018 年 2 月～3 月）
実践の所要時間	1 回あたり：3 日間（宮城での活動） ＋5～20 時間（事前事後活動→内容により変動）
実践の運営側で動いた人の人数	(1)４人　(2)５人
防災教育の対象者の属性	(1)高校生　(2)中学生・高校生
防災教育の対象者の人数	(1)35 人　(2)約 20～40 人（見込み）
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区・豊島区／宮城県亘理町・仙台市・塩釜市・東松島市・名取市・石巻市
実践を行った具体的な場所	(1)【研修当日】荒浜中学校体育館（亘理町）、小さき花幼稚園ホール（仙台市）、塩釜市仲卸市場、野蒜市民センター（東松島市）、防災体験型宿泊施設KIBOTCHA（キボッチャ）（東松島市）、大曲地区海岸（東松島市）、ゆりあげ港朝市（名取市）、閖上の記憶（名取市） 【事前事後研修】目黒星美学園中学高等学校マリアホール、アンテナショップ「宮城ふるさとプラザ」（池袋） (2)【研修当日】東北福祉大学（仙台市）、こころの森（石巻市）、防災体験型宿泊施設 KIBOTCHA（東松島市）、荒浜中

	学校体育館（亘理町）　※現在の予定・一部調整中
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	元仙台市地震防災アドバイザー、東松島市役所職員（マンホールトイレ及び備品）、KIBOTCHA 職員（火起こし道具）、避難所運営を経験した教員、高校生・大学生語り部ガイド、移動手段（大型バス借り上げ）

<table>
<tr><td>達成目標</td><td colspan="2">試行錯誤しながら手作りで企画する中で、目標や目的を柔軟に変えながら、活動を継続している。現在の主な達成目標は以下の通り。
①防災学習を通し、防災意識を継続して高める機会とする。
②宮城での活動では、まずは「知る」ことを重視し、自分たちにできる活動を行う。特に東北での学びを自分たちの住む地域で活かすという視点と行動力を持つ。
③同時に復興がどのように進んでいるか直接知ることで、自分たちが当事者になったときに長期的視点で復興に貢献できる視点を持つ。
④宮城県の魅力を知ってもらい、交流人口を増やす。（担当教員の出身地であり、この目標が企画継続のモチベーションとなっている。）
⑤コミュニケーション能力を高め、学びに向かう力を育てる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">★被災地ボランティア研修の企画のコツ
・企画の立て方は、次の表を埋めていくイメージ。
<table>
<tr><th></th><th>1 日目</th><th>2 日目</th><th>3 日目</th></tr>
<tr><td>朝</td><td></td><td>朝食</td><td>朝食</td></tr>
<tr><td>午前</td><td>―移動―</td><td>活動 2</td><td>活動 4</td></tr>
<tr><td>昼</td><td>昼食</td><td>昼食</td><td>昼食</td></tr>
<tr><td>午後</td><td>活動 1</td><td>活動 3</td><td>―移動―</td></tr>
<tr><td>夜</td><td>夕食・宿泊</td><td>夕食・宿泊</td><td></td></tr>
</table>
・企画のサイクルとしては、以下のような流れ
4 月～7 月：企画⇒7 月：研修実施
11 月～3 月：企画⇒3 月：研修実施</td></tr>
</table>

・旅行代理店を入れずに、手作りしているため、常に情報収集をしている。ニュースやインターネットなどで気になる情報を見つけたら、すぐに連絡してみるという行動力が、企画に結びつく。

（1）第 14 回研修スケジュール

◆1 日目（7/20）

7:30 東京出発（移動手段：バス）
14:00～16:30 荒浜中学校との交流会
17:00～18:00 入浴
18:30～ 宿泊場所：夕食・講話（元仙台市地震防災アドバイザー）

◆2 日目（7/21）

8:00～ 8:30 塩竈市魚市場おさかなミュージアム：見学
8:30～11:00 塩釜市仲卸市場：朝食・見学・インタビュー活動
11:45～12:50 KIBOTCHA：火起こし体験・炊き出し訓練
13:00～15:00 マンホールトイレの組み立て体験
15:00～16:45 高校生・大学生による語り部ガイド
（大曲地区・野蒜地区）
16:45～18:00 避難所ワークショップ：
講師は東日本大震災で避難所運営を経験した教員
18:00～19:00 大高森から夕日を見学
19:15～ 夕食・入浴・就寝

◆3 日目（7/22）

6:30～ 7:30 抜き打ち避難訓練（津波）
7:30～ 8:30 朝食・片づけ
8:30～ 9:30 レジリエンス研修・修了式
10:30～12:00 ゆりあげ港朝市・閖上の記憶

事前事後研修・課題：研修をより実りあるものにするため、事前事後活動の充実を図っている。
①講演会：テレビディレクター（災害報道を担当）、新聞記者（東松島市での取材を担当）、国際機関職員（社会病理学・防災業務も担当）
②復興支援イベント：第５回星美っ子出張販売（@宮城ふるさとプラザ）
③事後提出課題：A：レポート「私の伝えたいこと」（1000 字以上）

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">B：マンホールトイレの新しいネーミングを考えよう！
C：母子避難所の提案をしよう！</td></tr>
<tr><td>得られた成果</td><td colspan="2">・夏休みに実施する研修としては、過去最高の 35 名が参加した。
・同世代の語り部の話や母子避難所を意識したワークショップ、レジリエンスについての講義などを経験し、生徒の防災意識が向上した。
・火起こし・抜き打ち避難訓練等を通して、これまで不足を感じていた実践的行動・技能も身につけられた。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">【活動の意義の模索】
・「なぜ、東京の女子中高生を被災地に連れて行くのか」、自問自答しながら企画を続ける中で、前述したような「達成目標」が見えた。
・以前、教員は「どのくらい生徒を被災地の役に立たせられるか」を意識しがちであった。発想を転換し、「いつか被災する可能性のある生徒が学ぶ機会」「生徒が自分がこれから何をすべきか、何ができるかを考える第一歩になる活動」と位置づけたところ、腑に落ちるものがあり、企画しやすくなった。
・3 回目までの活動（～2013 年 3 月）は、「被災地ボランティア」という名称であったが、位置づけを変えたことから「被災地ボランティア研修」という名称を用いている。単に「研修」として受け身にならないように「ボランティア研修」としているのも工夫の一つである。
【企画の工夫・課題】
・「目に見えて満足感の得られるボランティア活動をしたい」というニーズが生徒の中にあるが、実際は短期間で生徒の出来ることは限られている。生徒の思いを大切にしながらも、現実も伝えるようにしている。数日の活動の中で一喜一憂するのではなく、何ができるか考える第一歩にするように指導している。
・「宮城の魅力を知ってもらう」という目的もあるため、美味しい食べ物を食べたり、綺麗な景色を見てもらったりする機会も設けるように</td></tr>
</table>

	している。卒業後も、宮城を繰り返し訪れる卒業生もおり、交流人口の増加に貢献できている。 ・参加者が増加傾向にあり、大人数のために学びが薄くならないような配慮・工夫に毎回、試行錯誤している。 ・手作りで企画するため、予定を詰め込み、タイトなスケジュールにする傾向があるので、注意している。 ・入浴施設の無い宿泊場所のこともあるので、大人数が入れる銭湯を探す必要がある。また、大型バスを駐車できるホテルがなかなか見つからないこともある。（実は、苦労するポイント。） **【継続のコツ】** ・年に 2 回の企画の為、勿論、負担はある程度あるが、「宮城県ファンを増やす」という目的を掲げることで、企画担当教員（宮城県出身）のモチベーションを保っている。「企画する教員の思い」にかかっている面はあるので、いかに企画者が、やりがいを見出すかは活動継続の鍵になる。一方で、「誰でも企画できる手法」の確立は不十分なため、企画のノウハウの共有化を図っていきたい。

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	みやぎ教育旅行等コーディネート支援センター
関係者の説明	（団体ＨＰより）宮城県では、宮城県へのボランティアツアーの円滑な実施や震災の経験についての学習・研修を目的として宮城県を訪れる観光の支援を行っていくこととしております。このため、宮城県では「みやぎ観光復興支援センター」及び「みやぎ教育旅行等コーディネート支援センター」（以下、「支援センター」）を設置し、被災地区の観光情報や震災・防災プログラム、各種体験プログラムなどの情報を発信していきます。被災地の観光に関する情報を知りたい旅行会社、学校などがございましたら、支援センターまでお問い合わせください。
関係者の連絡先	https://www.pref.miyagi.jp/site/kankou/shien-center.html

記入日	2018 年 12 月 17 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	８（C:被災地訪問・支援②）
タイトル	修学旅行における防災学習～あの日から２年、再び熊本へ （熊本市・益城町での初めての防災学習コースの実施）
実践担当者のお名前	青木 美樹（キャリア教育）・清水 真弓（高２主任）

実践にかかった金額	非公開（個別にお問い合わせください）
実践の準備にかかった時間	１週間
実践活動を実施した日時	2018 年５月 11 日 11 時 20 分～14 時 10 分 ※修学旅行は５月７日～11 日、最終行程として実施
実践の所要時間	約３時間
実践の運営側で動いた人の人数	23 人（教員６・旅行会社２・住民 15 人）
防災教育の対象者の属性	高校生
防災教育の対象者の人数	82 人
実践を行った都道府県と市区町村	熊本県熊本市・益城町
実践を行った具体的な場所	ＫＫＲホテルの空中庭園（熊本城見学のため） ・益城町東無田地区
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	語り部ガイド（東無田復興委員会・地元女性グループ）

達成目標	本校では、５月上旬に九州での修学旅行を実施している。例年、最終日に熊本城と阿蘇山を見学する行程を取っていたが、2016 年４月の熊本地震の影響で、熊本のコースを中断していた。今回、２年ぶりに熊本をコースに戻し、新たに「災害スタディツアー」として実施した。 本校では、熊本地震発生直後、生徒が立ち上がり、１万 7000 回分の携帯トイレを作成して現地に送り、益城町の方から、「在宅避難で途方に暮れていたときに届いて、とても助かった」というご連絡を頂くという経験をした。多くの生徒が、早朝から作業を行い、修学旅行に行けなくなった当時の高校２年生も、修学旅行の事前研修に使うはずだった時間を使って、作業を行ったり、募金活動を行ったりした。

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">以上のような背景があり、関りを持った熊本市・益城町を実際に目で見る学習を行わせたいと考えた。送って終わりではなく、その地域を実際に訪れることで、活動に継続性を持たせる機会とした。
また、「現地にお金を落とすという支援の形にもなる」というアドバイスも受け、今回、熊本にルートを戻すことになった。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">企画：修学旅行をコーディネートしている旅行代理店に防災学習コースを含めたプランの提案を依頼した。

当日：
❶熊本市内のホテルの空中庭園から
再建中の熊本城を見学（昼食を兼ねる）
↓
❷熊本市から益城町にバスで移動
↓　…語り部ガイドが乗車
❸５つのグループに分かれて、見学ルートを歩く

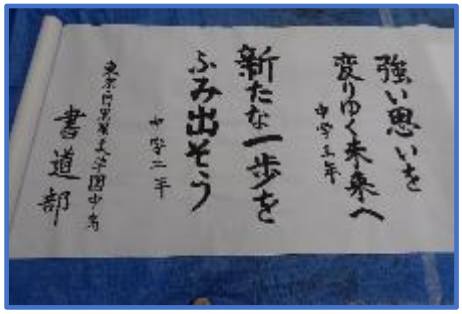
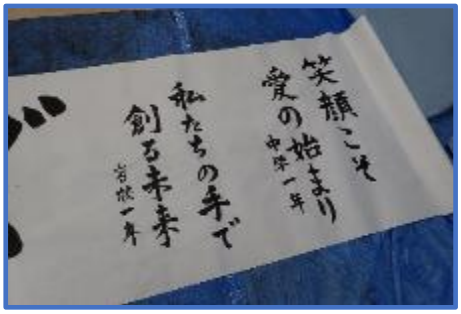
・各グループに語り部ガイドがついた。語り部ガイドの案内で、更地が目立つ集落や仮設住宅の見学を行った。
・ポイントに案内役が立ち、ポイント毎に説明を受けた。
・地元の大学生ボランティアからも被災当時の状況を詳しく聞くことができた。
・最後は、地元の神社で解散した。
・最後に、生徒会長から本校で作成した携帯トイレをお世話になった皆さんにお渡しし、ガイドの皆さんからは一人一人に手作りブロー</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">チをいただいた。
・解散場所の神社では、地元の主婦の方々が作成したポーチなどの手芸品が売られており、記念として購入する生徒もいた。</td></tr>
<tr><td>得られた成果</td><td colspan="2">・宮城県での「被災地ボランティア研修」は希望者制であるが、本実践では、学年全員が被災地を訪れて学ぶ経験を持つことができた。
・実際に現地を歩くことで、地震の爪痕を実感し、一人一人が防災意識を高めた。
・住民同士の共助により、困難を乗り越えたエピソードなどを通じて、共助や受援力について学んだ。
・熊本地震の際に、携帯トイレを送る経験している学年なので、実際に現地を訪れることで当時を思い出し、より関心を持つことができた。
・熊本日日新聞の取材を受けた。（2018 年 5 月 12 日朝刊に掲載）
・後日、東京在住の熊本の観光担当者から、修学旅行継続の感謝を伝えられると共に、「熊本への修学旅行が減った中で、どうすれば、他の学校へアピールできるか」という質問を受けた。
→学校視点から、「日本全国、どこでも災害が起こる可能性がある。それであれば、経験を活かした災害対応力が高いことは学校へのアピールになるのではないか」という提案をした。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">・事前の工夫として、心構えとして、「かわいそう」といった他人事の視点ではなく、「自分たちの住む地域にもいつ地震が来てもおかしくない」「災害が起きたときに何ができるか」「教訓にできることは何か」という視点で、自分自身の学びの機会にしてほしいと伝えた。
・今後も、防災教育を目的の一つとした熊本への修学旅行を継続する予定であり、引き続き、見学・活動先の情報収集・検討を行っていく。</td></tr>
</table>

記入日	2019 年 1 月 15 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	9 （C:被災地訪問・支援③）
タイトル	「私たちにできること」忘れない思いをカタチに （書道部による 3.11 追悼イベントのための大型作品・竹灯篭作り）
実践担当者のお名前	伊藤 節子（書道科主任）・須藤 清（書道部顧問）

実践にかかった金額	3 万円未満
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2018 年 12 月 10 日～2019 年 2 月 19 日
実践の所要時間	36 時間
実践の運営側で動いた人の人数	3 人
防災教育の対象者の属性	中学生・高校生
防災教育の対象者の人数	15 人（書道部部員）
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区・宮城県亘理郡山元町
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校書道室 山元みんなのとしょかん敷地（追悼イベント会場）
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	大型作品：大型作品用書道用紙（9.5M×２本）、墨汁、イベントカラー／竹灯篭用イラスト：プラスチック障子紙、マジック、クレヨン

達成目標	被災地ボランティア研修で繋がりができた山元町の町民の方から、3.11 の追悼イベントの会場に展示する大型の書道作品の作成を依頼された。昨年度より始まった取り組みで、今年度は大型２作品と竹灯籠用のイラストを作成した。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	**⓪依頼**　山元町のイベントの実行委員から作品の依頼を受ける ⇩ **①書道部員で話し合い、作品の構図と言葉を考える** ★中心となる言葉：**「心を繋ぐ　想いを繋ぐ」「手を繋ぐ　夢を繋ぐ」** ⇩ **②学年ごとのメッセージを考える** 学年ごとに懸命に言葉を選び、ふさわしい表現か先輩からアドバイスを受けながら推敲を重ねた。   ⇩ **③作品を作成する** やり直しのきかない大型作品なので、失敗できない緊張感とプレッシャーも書道の学びになった。

	竹灯篭用のイラストも、同時並行で作成した。（本番はプラスチック障子紙を使用、写真は下書き。） ⇩ **④校内報告**（1/19） 学校行事の中で、全校生徒の前で作品と活動について紹介する。 全校生徒が被災地に心を向け、関心を持つ機会にもなっている。 ⇩ **⑤現地へ送る**→2019 年 3 月 11 日に追悼行事の会場に展示される ※参考：昨年の様子（2018 年 3 月 11 日撮影）
得られた成果	・生徒各自が真剣に取り組み、書いて表現し、追悼イベントに作品を通じて参加できる経験は、指導者としては、この上ない教育活動であると考えている。 ・生徒がオリジナルのメッセージを考え、心を込めて作品を作成することができた。書道部としての学びと成長にも繋がった。 ・生徒が「私たちにできること」を実行することで、震災を思い出し、心を寄せる機会になった。 ・書道部ならではの活動で貢献することで、自らのスキルを活かして社会に貢献する意識を持つことができた。（プロボノの意識） ・被災地ボランティア研修に参加経験のある生徒から、参加経験のない生徒に経験を伝える機会になった。このように思いのこもった活動が、先輩から、後輩に受け継がれるのが、本校の防災教育・被災地支援活動の良い点であると自負している。

どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・被災地ボランティア研修で、継続して山元町を訪問する機会を設けていきたい。（昨年度は、３月の被災地ボランティア研修で山元町を訪問し、直接、現地の方から感想を聞くことができた。） ・費用の一部として、生徒が行ったバザーの収益を充てた。生徒は、自分の行動が新たな形で誰かの役に立つ、という実感を持つことができた。 ・「時間が経ってから、現地のニーズに合わせて、作品を作成する」という支援方法があるという教育にも繋がる。本校では、「支援する側」の防災教育の必要性にも着目している。災害発生直後に、闇雲に子どもたちの作品やメッセージを送ることは、「支援物資のミスマッチ」に繋がる可能性がある。今回の事例をその視点で、授業で取り上げると新たな学びになると考えている。	

記入日	2018 年 12 月 20 日
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	10（D:災害時のトイレ問題①）
タイトル	もしものために今、できることー「魔法の携帯トイレ」を通じて、命を救うボランティアをしよう！ー （学校内外での災害時のトイレ問題の啓発活動）
実践担当者のお名前	京 百合子（生徒教育部防災係・防災ボランティア研修係）

実践にかかった金額	5 万円未満
実践の準備にかかった時間	数時間（１回あたり）
実践活動を実施した日時	通年（2018 年 4 月～2019 年 3 月）
実践の所要時間	１～３時間（１回あたり）
実践の運営側で動いた人の人数	各回１～15 人程度
防災教育の対象者の属性	中学生・高校生・地域住民・全ての人々
防災教育の対象者の人数	約 550 人（合計）
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区・新宿区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校・日本赤十字社東京都支部・大蔵第二運動場体育館・砧公園・大蔵団地、他
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	オリジナル携帯トイレの材料：吸水シート（※製造終了）・ポリ袋・臭断袋・結束バンド・説明書、使い方の知識

達成目標	①女子校である本校では、災害時にトイレ環境の悪化により、特に女性が水分を控えエコノミークラス症候群になる問題に着目した。 ②生徒の目標として「魔法の携帯トイレ」作りを通じ、地域に「災害時に水分を控えて体調を崩してはいけない」という意識を広める。 ③最大の目標は、活動を通じて「普及活動の主体である生徒自身が、災害時のトイレへの抵抗感を無くすこと」。災害時のトイレのイメージアップと「トイレに行ける人づくり」を目指している。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	**【活動に至る経緯】** ①宮城県の交流している中学校を訪問した際に「地域住民が学校に避難し、深刻なトイレ問題が発生した。卒業式のために飾っていたペーパーフラワーをトイレットペーパーとして使った」という体験談を聞いたことがきっかけとなり、この問題に着目した。 ②まず、安価で衛生的なオリジナルの携帯トイレを考案し、十分な携帯トイレは備蓄した。（＝ハード面の整備） ③しかし、携帯トイレに女子生徒は抵抗感を持ち、使えない可能性があることに危機感を覚えた。災害時のトイレに対する生徒の意識を変える防災教育の必要性に気づいた。（＝ソフト面の整備） ⇩ ④生徒の意識改革のために、最も効果的な教育方法は、「災害時のトイレ問題を生徒が解決すべき社会課題」として示すことであった。「自分たちの活動が多くの人の命を救うことに繋がる」という気づきが、生徒の意識を変えた。 **【魔法の携帯トイレ】**（完成品は 1 回分 A6 サイズ） コミュニケーションをとりながら、材料を詰める作業や使い方の説明、災害時のトイレ問題の啓発を行う。相手に伝えるために、生徒は自分自身が、まず使い方と問題について、深く理解しようとする。

【具体的活動】

①日本赤十字社東京都支部 中高生連絡協議会「携帯トイレ講習会」

（6/23）@東京都支部　◆対象：中高生（約 80 名）

今年度、日本赤十字社の防災教育の取り組みとして、「携帯トイレ作り」が採用された。生徒３人が災害時のトイレ問題について発表を行った。小グループに分かれ、作り方を練習した。賛同する学校が、各校で普及活動に取り組んでいる。

②西日本豪雨支援（7 月中旬）◆参加者：本校生徒・教員（約 15 名）

有志生徒が、携帯トイレを作成した。親戚の支援に向かう生徒が、200 回分を持参し、現地でニーズの確認を取って必要な場所に提供した。

③NPO 法人砧音楽療法研究会「第 10 回 0 歳~100 歳☆音楽まつり 防災だよ、全員集合！」(8/28)　@大蔵第二運動場体育館

◆対象：障がいを持つ子どもを含む地域住民（約 80 人）

参加者全員で携帯トイレ作りを行った。２人の生徒が、舞台の上で作り方と使い方を説明した。2 人とも初めて携帯トイレ作りを指導する生徒だったが、自分の言葉で伝える努力をしていて、参加者に好評だった。教員と行政職員で生徒の発表のサポートをした。

④災害対策について「伴に」考える研究会 第 19 回定例会

「私立女子校の強みを活かした防災教育」（9/4 18:30～20:30）

@成城中学校・高等学校

◆対象：地域住民・防災関係者・教員など（約 55 人）

夜間の開催で在校生は参加できない代わりに、卒業生 1 人が指導者として参加した。本校の取り組みや防災教育について教員と卒業生で講演を行い（約 1 時間）、後半に携帯トイレ作りのワークショップ（約 30 分）を行った。

④学園祭（9/17）@目黒星美学園中学高等学校

◆対象：来校者（約 10 人）

ボランティアクラブのブースで、「心を込めて２個作って１個は持ち帰り、１個は寄付する」という企画を行った。指導する生徒も、参加者にもいつもより丁寧に作業する様子が見られた。

⑥「防災エンスショー」（9/23）@目黒星美学園中学高等学校

	◆対象：地域の小学生（約 30 人） ３人の生徒が、子ども達に携帯トイレ作りを指導した。幼児と小学校低学年の参加者が多く、作業内容を簡単にして、絵を描いてもらう作業をメインにしたところ、非常に楽しそうに取り組んでいた。 **⑦砧公園「防災フェスタ 2018」**（12/2）@砧公園ねむのき広場 ◆対象：地域住民（約 30 人） テスト期間で生徒は参加できなかったため、教員１人で参加した。ブースを地域の方が手伝ってくださり、協力しながら運営できた。たまたま公園に来た人が立ち寄るケースが多く、初めて災害時のトイレ問題を意識したという人が多かった。今後は生徒に防災ブースを企画してもらい、実際に実現する企画にしても面白いと思った。 **【今後の予定】** **⑧生徒を対象とした作成研修会**（２月～３月） @目黒星美学園中学高等学校　◆対象：本校生徒（約 170 人） 生徒が、学校内外での普及活動の主体になれるよう人材育成を目指す。トイレ問題については、授業等で触れているので、携帯トイレの作り方を覚えて、人に教えられるようにする。 **⑨ひまわり喫茶**（２月下旬）@大蔵団地◆対象：団地住民（約 40 人） ひまわり喫茶は、地域の団地で定期的に開いている高齢者との交流会。被災地ボランティア研修で作成した携帯トイレを住民にプレゼントして、防災ミニ講座を開く。 **⑩世田谷区 女性防災リーダー育成研修会（第３回） 「災害時のトイレ問題」**（3/16）@世田谷区立男女共同参画センターらぷらす ◆対象：研修参加者（約 40 人） 教員と生徒で、講演及びワークショップを２時間半担当する。参加者（女性防災リーダー）が地域に戻って、災害時のトイレ問題の啓発活動が行えるように有意義な研修を目指す。
得られた成果	・①：青少年赤十字加盟校 15 校、企業イベント等で普及活動が行われた。今年度から３か年で、都内 28 の区・市の赤十字ボランティアが地域での普及活動に取り組んでいる。このような動きは、これまで取り組んでいた生徒達の達成感に繋がると同時に、低学年にとっては活

	動と災害時のトイレ問題のイメージアップに繋がった。 ・④：初めて卒業生の協力を得て、活動を行った。地域の防災関係者が多かったが、若い世代が防災に取り組む姿は刺激にもなっていた様子で、非常に好評だった。明るい雰囲気で、楽しく作業ができた。今後も卒業生とこのような連携を取れると良いと思った。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・災害時のトイレ問題は、「ハード面（トイレそのものの備え）」に着目しがちだが、最初に「なぜトイレ問題が重要なのか」を納得してもらい、「この活動が将来的に命を救うことに繋がる」という意識を持ってもらうことで、学習効果が著しく上がる。 ・これまで材料として使っていた「吸水ポリマーシート」の製造が終了したため、今後の活動の展開方法について検討している。（例：身近にあるものを使ってトイレを作る方法の紹介）ただ、第一の目的は災害時のトイレ問題の啓発活動であるので、良い転換期と捉えて、新たな活動を模索していきたい。	

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	災害時のトイレ問題を訓練などで取り上げようと考えている方
伝えたい内容	災害時のトイレを子供に担当させると、地域の防災意識向上に繋がるだけでなく、子供自身の意識が変わり、一石二鳥です。「魔法の一言」を付け加えると効果的です。例えば、「訓練に来た人にトイレの大切さを伝えると、災害時に命を救うことに繋がるよ」「災害が起きる度に、多くの人が水分を控えて命を落としてきた。『危険性を知らない』という人が多いから、大切さを伝えてみよう」と、前向きになれる言葉がけをして、任せてみてください。以前、他校の中学生に、この言葉がけをしたところ、トイレの説明を初めて受けた 30 分後には、地域住民に対して、堂々と説明をしていました。是非、子ども達を「教わる側」から「教える側」にしてみてください。

記入日	2018 年 12 月 20 日
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	11（D:災害時のトイレ②）
タイトル	生徒のアイディアが詰まった「マンホールトイレ」をわくわく組み立てよう！　（東松島市での活動）
実践担当者のお名前	京 百合子（被災地ボランティア研修企画担当）

実践にかかった金額	1000 円未満
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2018 年 7 月 21 日 12 時 45 分～15 時 00 分
実践の所要時間	2 時間 15 分
実践の運営側で動いた人の人数	7 人（引率者 4 名、東松島市職員 3 名）
防災教育の対象者の属性	高校生
防災教育の対象者の人数	35 人
実践を行った都道府県と市区町村	宮城県東松島市
実践を行った具体的な場所	・野蒜市民センター ・野蒜市民センター前のマンホールトイレ設置場所
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	人材：マンホールトイレの啓発活動を担当する市役所職員 物品：マンホールトイレおよび備品、ポンプ、軍手

達成目標	生徒が自らのアイディアが具現化したマンホールトイレの組み立てを経験することを通して、以下のことを目指した。 ①生徒自身の災害時のトイレへの抵抗感を無くす。 ②マンホールトイレ組み立ての技能を身につける。 ③授業で出したアイディアが、実際に社会の中で役立つ経験をすることで、学びの意義を見出す。	
どの力を身につけようとしましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	かなり

実践内容・方法	**◎実践に至った経緯** 2015 年に国土交通省からの依頼で、「マンホールトイレの理想的な環境」について女子校生視点で提案を行った。 ※成果は、国土交通省「マンホールトイレ整備・運用のためのガイドライン」に事例として掲載（p.49，2018 年度版 p.50） ※写真は、本校の廊下に設置した生徒のアイディアを具現化したマンホールトイレ （2015 年撮影） ⇒宮城県東松島市で、生徒の出したアイディアを実際のマンホールトイレの整備の参考にしてくださったご縁で、７月の「被災地ボランティア研修」で、東松島市を訪れ、組み立てに取り組むことになった。 **◎当日の実践内容** **①マンホールトイレ研修会** 東松島市役所の職員の方から、マンホールトイレの仕組み、東日本大震災での運用、イベントでの体験利用、普及活動などについてお話を伺った。 **②マンホールトイレ組み立て体験** 【所要時間：組み立て～片付けで約１時間】 ・６基のマンホールトイレとポンプを組み立てた。 （４基が女性用・グリーン、２基が男性用・ブルー） ・市役所職員の指示を受けながら、倉庫からの運搬、マンホールトイレの上屋の組み立てと備品の設置、ポンプの組み立て、片付けまで、一連の流れを経験した。

得られた成果	**◎研修・組み立て体験から得られた成果** ・炎天下にも負けず、生徒は、非常に生き生きと作業を行っていた。マンホールトイレが、より身近なものになったと思う。 ・倉庫からの運び出しから片づけまで一連の流れを経験することで、技能が身についた。 ・参加者のうち、高校 1 年生は、中学 3 年生のときにアイディアを提供した学年であることから、自分たちのアイディアが具現化して役立っていることを目の当たりにし、達成感を感じていた。 ・「冷たい印象のブルーではない色が良い」「流水音発生装置や防犯ブザーの設置が必要」「自動でつくライトがあると衛生的で安心」といった意見が実現されているのを、実際に見ることで、女性視点・女性に配慮した防災対策への関心がより高まった。 **◎研修後に新たに得られた成果** 「マンホールトイレの新しいネーミングを考えよう！」 ・マンホールトイレ研修会の中で、東松島市の職員の方から「マンホールトイレの親しみやすい新ネーミング」の提案を依頼された。事後課題として、ネーミング候補を考えた。

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">・生徒が出したネーミング候補に対して、下水道課で投票を行ってくださり、「災害時安心マンホールトイレ」に決定した。

ネーミング候補（一部）
・「災害時でもスッキリキレイトイレ」：災害時でも、トイレに行くことを我慢せずに、安心して使えるマンホールトイレをイメージしました。
・「災害時おまかせトイレ」：災害時みんなが頼れるトイレに
・「災害時よっトイレ」(よってくる)：災害時みんなが躊躇せずに立ち寄れるトイレに
・「乗り切ろうトイレ」：災害があり、心も体も不安定だけれどみんなで乗り切ればという意味でつけました。
・「（みんなの）アイディアいっぱいトイレ」：みんなのアイディアが実現したことを主張するといいのではないかと思いました。
★「災害時あんしんトイレ」
★沢山考えた結果マンホールトイレがベストだと思います。「マンホールトイレ」響きも可愛いです。災害時用とわかりやすくできるように「これは災害時のマンホールトイレだよ?」と学校などで連呼すれば認知にも繋がると思います。変に名前を変えてしまったら呼ばれてもなんのことか分からないという事態が 1 番困るとおもいます。とりあえず私はマンホールトイレの響きは好きです。

★は、採用されたネーミング案。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">・地域の防災訓練では、「大人の男性がトイレを組み立てるのを、子どもたちは見ている」というケースが多いように思うが、サポートや指示があれば女子生徒でも無理なく出来た。「自分で組み立てる経験」というのは、災害時のトイレへの抵抗感を下げ、主体的な防災意識を持つことに繋がることが改めて分かった。
・本校で、マンホールトイレを組み立てたのは、１回だけなので定期的な組み立て体験が必要。今回の経験をきっかけに、再度、学校での取り組みも深めていきたい。</td></tr>
</table>

	・本校では、災害時のトイレの「実際の使用体験」までは、できていないのが現状である。東松島市ではお祭りなどのイベントの際に、設置して住民に体験してもらう取り組みを進めているので、参考にしたい。 ・災害時のトイレ問題の解決には、「ハード＝トイレそのもの」の整備も重要であるが、特に女性の場合は「ソフト＝トイレに行くことの重要性の認識と行く勇気」を育てることも重要である。この点からも今回の取り組みは、その両面をバランス良く学べたと思う。 **★わくわく「ぷちぷち My 便座カバーづくり♪」** ・本校から出したアイディアの中で、緩衝材を使った「ぷちぷち便座シート」について、東松島市の職員の方から、高評価をいただいた。本校でも楽しく「便座カバーづくり」に取り組む企画を考えていきたい。

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	東松島市役所　小田島 毅
関係者の説明	東日本大震災でマンホールトイレの運用を担当した。現在は、東松島市の危機対策専門員を務め、マンホールトイレの啓発・普及活動のため、各地で講演や指導を行っている。
関係者の連絡先	東松島市役所：0225-82-1111（代表）

記入日	2018 年 12 月 5 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	12（E:発信活動）
タイトル	「伝えたい！」という気持ちを表わそう （生徒による発信活動のまとめ）
実践担当者のお名前	京 百合子（防災ボランティア研修係）・ 市橋 朋之（被災地ボランティア研修引率者）

実践にかかった金額	1 万円未満（※商品の仕入れを除く）
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	通年（2018 年 4 月～2019 年 3 月）
実践の所要時間	数日
実践の運営側で動いた人の人数	10 人
防災教育の対象者の属性	中学生・高校生・教職員・地域住民・全ての人々
防災教育の対象者の人数	約 550 人（全校生徒・教職員）
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区・豊島区
実践を行った具体的な場所	・目黒星美学園中学高等学校 ・宮城ふるさとプラザ…④の活動
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・展示資料（写真・模造紙）

達成目標	①有志の生徒から、自主的に防災や災害、復興支援に関わる掲示物や配布物を作成して配布したいという提案があったときに、それを実現させる。 ②取材依頼が来ることがあるので、できるだけ多くの生徒に機会を作る。生徒が取材を受ける経験をする中で、防災に対する思いを言葉にする経験を重ねる。実際の言葉にすることで、生徒自身の考えを深める。 ③学校外でのプレゼンテーションの機会を、生徒の発表の場として積極的に活用することで、生徒自らが防災に主体的に関わることの意義をより見出し、コミュニケーション能力を高める。

<table>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">

①🖊取材（5/8）：ジブラルタ生命の HP に掲載

・生徒６名（高 3）が、防災活動やボランティア活動についてインタビューを受けた。

「東京にいる私たちも未来の被災者かもしれない
～全校生徒が関わるボランティア活動～」

http://www.gib-life.co.jp/st/about/kouken/kodomo/soc/post-23.html

（※ボランティア・スピリット賞コミュニティ賞の受賞は昨年度）

②🖊取材（11/7）：日本赤十字社の情報誌に掲載予定

・災害時のトイレ問題と携帯トイレの普及・啓発活動について、３人の生徒（高 2）がインタビューを受けた。

③📌掲示：生徒による東日本豪雨報告（８月～11 月）

・親戚が被災した地域に住む生徒が、現地の状況を伝えたいと、現地で撮影した写真と、生徒へのメッセージを廊下に掲示した。

皆さんが被災地のために
できることはたくさんあります！

災害の被害は、直後はメディアで多く取り上げられ皆さんの関心にもとまりますが、しばらく経つと忘れられてしまいます。しかし重要なのは私たちがこの後どう行動するかです。

皆さんの行動が被災地に大きな影響を与えます。自分ができると思ったことは何でも積極的に行ってください！！

</td></tr>
</table>

④📌掲示・配布：復興支援イベントでの活動（9/29～30）

◎当日の様子⇒学校ＨＰ：「第５回星美っ子出張販売！」
http://www.meguroseibi.ed.jp/tabid/72/Default.aspx?itemid=1822&dispmid=390

・池袋にある宮城県のアンテナショップ「宮城ふるさとプラザ」で開催した復興支援イベント（第５回星美っ子出張販売）の一環で、発信活動を行った。
・生徒が活動してきた場所を中心に、宮城県を紹介する模造紙を展示し、お客様に見ていただいた。
・復興支援イベントの趣旨や防災を学べる場所の紹介をするチラシを作成し、約 1,000 枚を配布した。
・イベントに併せて、店頭で、西日本豪雨および北海道胆振東部地震被災地のための募金活動も実施し、生徒が募金を呼びかけた。

↑当日配布したチラシ（表面）　　↑模造紙

★今年度、東京証券取引所が提供する「起業教育プログラム」を導入した。模擬株式会社を立ち上げて、生徒が主体となって企画するプログラムの中で、イベントを通じて「何をどのように伝えるか」ということが明確になり、発信活動としても役立った。

	⑤📌発行：全校向け「防災減災通信」の発行（3 月発行予定） ・防災係の生徒と協力して、発行する。 **⑥🖊発表：防災教育チャレンジプランの中間報告会・最終報告会** ・「大学等の会場で防災の専門家を中心とした多くの方の前でのプレゼンテーション」は、生徒にとって、なかなかできない貴重な経験となる。緊張もするが、多くの学びを得ることのできる素晴らしい機会だと捉えている。 **⑦🖊発表（1/19）：被災地ボランティア研修校内報告会** ※「被災地ボランティア研修」については、「実践番号 7 」を参照 ・1 月に行われる学校行事の中で、夏の研修報告を行っている。参加した生徒が、写真を見せながら、活動内容を報告し、学んだことや思いを伝える。 ・「先輩の報告を聴いて、研修に参加することを決めた」という生徒も多く、活動の継承・継続に役立っている。 ・報告する生徒は、活動内容の紹介に加えて、活動に関心を持っている生徒が受け身の参加にならないように、以下のようなアドバイスを考えていた。 ◆被災地ボランティア研修では、様々な経験をすることが出来ます。しかし、自分の考えていたこととの違いや、思うようにいかないことに悩むこともたくさんあります。自分から行動しなければ、「良い経験」には繋がりません。今、考えていることと違ったものになるかもしれませんが、自分がやりたいと思ったことを行動に移せれば、新たな発見が得られます。
得られた成果	・生徒が「伝えたい」という思いを持って、発信する機会を作ることができた。 ・取材を受けることで、活動を振り返り、これまでなかなか言葉にできなかった思いを伝える経験をすることで、考えを深めることができた。活動を続けるモチベーションが高まった。 ・低学年の生徒も先輩たちの行動を見ることで、活動に関心を持ち、自分から行動することの大切さを学んだ。

どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・「防災減災通信」は定期的な発行を目指し、防災係の生徒もやる気はあったが、教員の手が回らなかった。役割分担が不足していたのが課題である。 ・募金活動に関しては、金額のみに着目するのではなく、自分たちが呼びかける意味を考えさせるようにしている。生徒が呼びかけると耳を傾けてくださる方、足を止めて協力してくださる方が多く、生徒は信頼されていると感じ、責任感を持つようになる。	

記入日	2018 年 12 月 15 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号	13（F:教職員対象）
タイトル	先生だってわくわく防災減災―想像力を止めずにイチから考えてみませんか？未来の被災者を育てるために― （教職員を対象とした防災研修の提案と実践）
実践担当者のお名前	(1)小林由季・本間裕規・京百合子（生徒教育部防災係） (2)京百合子（東京私学第 8 支部防災委員会副委員長）

実践にかかった金額	非公開（個別にお問い合わせください）
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	(1) 2018 年 8 月 30 日 9 時 30 分～15 時 30 分 (2) 2018 年 11 月 30 日 15 時 40 分～17 時 00 分
実践の所要時間	(1) 6 時間　(2) 1 時間 20 分
実践の運営側で動いた人の人数	(1) 3 人　　(2) 3 人
防災教育の対象者の属性	教職員
防災教育の対象者の人数	(1) 約 50 人　(2) 約 30 人
実践を行った都道府県と市区町村	(1)(2) 東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	(1) 目黒星美学園中学高等学校校舎全体 (2) 世田谷区内の私立学校
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	(1)救命講習指導員（消防署に依頼）・蘇生訓練用人形・訓練用 AED　(2)防災の専門家（防災ネットワークプラン井上浩一先生に依頼）

達成目標	「生徒」向けの防災教育に着目しがちだが、「先生に対する根本的な防災教育の機会」が無いと現場にいて感じる。 教職員が、防災に対する本音を言いやすい環境づくりをする。そのことが、教職員自身が災害を直視し、自分たちが何をすべきか、何ができるのか考える本当の第一歩になると考える。本実践の目標を一言で言えば、「先生の防災スイッチを入れる！」である。

実践内容・方法	**（１）本校教職員対象**（8/30） **①初動訓練**（9:00～9:20@職員室） 職員室内のロールプレイ・器具確認 ６月の防災訓練の失敗・反省を活かして、初動のロールプレイを行った。防災・防犯に関わる放送設備や通報設備をひとつずつ確認した。係以外は使い方を知らなかったり、存在を見落としていたりするので、有意義だった。 **②映像を通じて危機感と想像力を高めよう**（9:25～9:35@大会議室） ・ガラスを割る実験動画を視聴： 飛散防止フィルムの有無でどのように割れ方が違うか等 ・東北地方太平洋沖地震発生時の映像を視聴： 東北各地と首都圏（東京と神奈川）の揺れの様子 **③学年別ワークショップ**（9:35～11:30） **＊管理職・防災係チーム** 今年度から改定を進めている新しい学校防災マニュアル案をもとに、学校としての対応を改めて議論・検討した。 **＊各学年団** それぞれの学校・学年行事ごとの危機管理について話し合い、「防災チェックリスト」を作成した。 ・中１学年団：７月の野外活動 ・中２～高２学年団：11 月の校外学習・宿泊行事 ・高３学年団：クラブ合宿 **＊事務職員** 発災後の保護者からの電話問い合わせに対する「受け答えマニュアル」を作成した。 ※尚、本校では、保護者に対して、発災後の電話での問い合わせを控えるように伝えている。

④炊き出し訓練・昼食

【メニュー】アルファ米・焼き鳥缶親子丼、くだもの缶、
備蓄用ようかん・クッキーの試食

・今年度は、炊き出し訓練を事務職員の担当とした。事前に食料保管場所に案内し、主に備蓄している食料を利用して、メニューを考えるところからお願いした。

・カセットコンロとボンベでお湯を沸かしたが、アルファ米は今回は敢えて水で調理して試食した。

・炊き出し訓練に併せて、学校に備蓄している食料一覧を使って、１週間の滞在者数の見込みと併せて、どのように食料を使うかの「食料戦略シート」を用意した。（時間が足りず、話し合いは未実施）

⑤救命講習（3 時間コース）

・消防署に依頼して、指導員を派遣してもらった。

・昼食時に、各自が書類に必要事項を記入した。

（２）私立学校教職員対象（11/30）

①副委員長からの講話（京担当）

②被災現場・避難所の状況について（15 分）

講師：防災ネットワークプラン　井上浩一氏

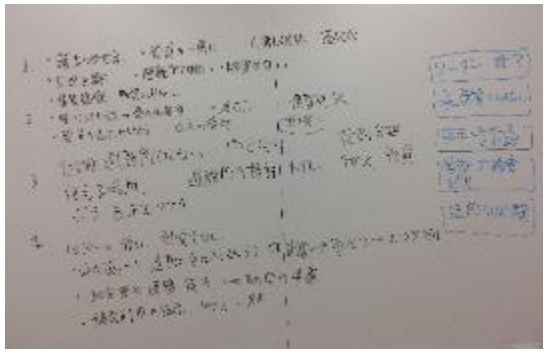
③ワークショップ「最初の 10 分を考えよう」

小グループに分かれて、学校にいるときに災害が起きたら、「最初の 10 分間でどのようなことが起こるか」を想像した。状況を付箋に書き出して、その対応策を考えた。

④まとめ

各グループからの報告後、井上先生からまとめと講評をいただいた。

【写真】各グループで出たアイディアのまとめ



得られた成果	・防災に関わる活動・訓練に自主的に参加する教職員が増加した。 ・想像力を働かせて話し合うことで、実際に災害が起きたらどのようなことが起こるか、何をすべきか、実践的な話し合いができた。 ・防災について話やすい雰囲気づくりに努められた。
課題・苦労・工夫	・（１）では、話し合いの前に映像を見せる工夫をした。これにより、教職員が想像力を膨らませる刺激になり、話し合いが活性化した。 ・特に「東日本大震災の首都圏の揺れ」の映像にも絶句する教職員もいた。体験の記憶が薄れかかっていたところ、映像を通じて改めて思い出し、危機感が大きく高まった。ガラスの割れ方実験も衝撃的であった。 ・時間の制約が大きいため、いかに短時間で効果的な研修を企画するかが重要である。

記入日	2018 年 12 月 10 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号）	14（G:地域）
タイトル	防災イベントを皆で企画して地域に防災の輪を広げよう！ （地域住民を対象とした「防災エンスショー」の開催）
実践担当者のお名前	小林由季・本間裕規・京百合子（生徒教育部防災係）

実践にかかった金額	非公開（個別にお問い合わせください）
実践の準備にかかった時間	1 日
実践活動を実施した日時	2018 年 9 月 23 日 11 時 30 分～13 時 00 分
実践の所要時間	２時間
実践の運営側で動いた人の人数	15 人（生徒 5 人・教職員 10 名）
防災教育の対象者の属性	幼児/保育園児/幼稚園児・小学生（低学年）・小学生（高学年）・中学生・大学生・教職員・地域住民・防災関係者
防災教育の対象者の人数	約 85 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 4 階多目的室及び廊下
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・「防災エンスショー」の講師 ・実験に必要な準備物（実験道具は、講師が準備）―長机 6 台、音響（マイク、CD デッキ）、電源、ミネラルウォーター、おしぼり、PC、プロジェクター、スクリーン ・広報用チラシ　・観客用椅子　・台（フラットな教室を使用したため、台を置いて一段高くして舞台を作った） ・携帯トイレの材料　・掲示用資料

達成目標	①本校の教職員と生徒が協力して、「地域住民向けの防災イベントを企画・運営する」という経験を通じて、自分自身の防災への関心と地域連携への意識を高める。 ②イベントの広報活動をきっかけに、地域の各施設を訪問し、本校の防災の取り組みの紹介や地域の防災力向上の提案などを行い、今後の連携や活動に繋げる。 ③これまで本校との繋がりがなかった住民と関わりを持つことで、地域

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">との連携を深め、本校の防災教育の方針や取り組みを伝える機会とする。イベントを通じて、地域の防災意識の向上に貢献する。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どの力を身につけようとしましたか？</td><td>知識・技能</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>かなり</td></tr>
<tr><td>実践内容・方法</td><td colspan="2">
【事前準備】
①講師との打ち合わせ（8/9 @仙台）
②チラシ作成＆広報活動（８月下旬～９月上旬）
・地域を包括する行政（砧まちづくりセンター）に、地域への広報の方法を相談した。近隣の小学校に直接チラシを持参した。
・参加人数を把握するために事前申し込み制にし、学校 HP またはファックスでの申し込みとした。
③会場設営（9/21）
【イベント当日】
10:00～11:00 講師到着・実験道具準備
11:30～12:30 「防災エンスショー」（11:00 開場）

📷写真左：化学部の生徒が、ショーのアシスタントや司会を務めた。
📷写真右：生徒の指導で、楽しく携帯トイレづくりを行った。
・受付・会場誘導・司会進行・実験のアシスタント・携帯トイレづくり指導・バザーは、主に生徒が担当し、教員はサポートを行った。

◎イベントの開催に合わせて、廊下に以下のようなブースを設けた。
✿オリジナル携帯トイレを作ろう！　✿復興支援ミニバザー
✿亘理町 PR 模造紙の展示（７月の被災地ボランティア研修で作成）
</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td>得られた成果</td><td colspan="2">①「教職員・生徒が協力して、地域に開かれた防災のイベントを企画し、地域と交流する」という目標（達成目標①）は、十分に達成できた。
②地域との連携の提案や一人一人が防災に取り組むことの大切さを直接、地域住民に伝えることができた。参加者の満足度は非常に高く、地域の防災意識向上に貢献できた。本校を初めて訪れる参加者が多く、特に男子の参加が多かったのもこれまでの行事にない特色であった。（達成目標③）
③本校生徒は、「防災エンスショー」の参加者として防災の知識を学ぶと同時に、運営側として地域の方を迎え、社会勉強になった。
④「防災エンスショー」ということで、これまで授業以外の防災活動にあまり参加したことの無かった化学部の生徒も、スタッフとして加わり、防災教育チャレンジプランの中間報告会での発表のチャレンジにも繋がった。
⑤他校の教員や防災を学ぶ大学生、地域の行政関係者などの参加もあり、お互いに新たな繋がりを作り、情報交換や今後の連携について話す機会にもなった。
⑥学校がイベントを開催しやすい条件や、地域住民が参加しやすい時間帯などが明らかになった。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">どのくらい身につきましたか？</td><td>知識・技能</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>思考力・判断力・表現力</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性</td><td>大いに</td></tr>
<tr><td>課題・苦労・工夫</td><td colspan="2">・達成目標の１つに「イベントの企画を広く地域に広報することで、まず本校の存在と防災の取り組みを知ってもらう」（達成目標②）という側面があったが、広報活動を始めて１週間で申し込みが予定を上回り、広報活動を止めざるを得なかった。地域の防災訓練等で広くＰＲしたり、地域の子どもたちがいる施設を回って、挨拶をしたりする計画であったのだが実現できなかった。とは言え、「防災のイベントには、一般の参加者がなかなか集まらない」という体験談を聞くことがしばしばあったので、申し込みが多かったのは、嬉しいことであった。
・「イベントの中身」まで手作りできるのが望ましいかもしれないが、時間的な制約やスキルを考えると、実施そのもののハードルが上がる。今回のような企画の場合は、外部講師やプロのご協力を得ること</td></tr>
</table>

	が、有用であると分かった。教職員や生徒で話し合い、協力し合いながらイベントを作ったので、手作りの良い雰囲気はあったと思う。今回できた地域との繋がりを、次の活動に繋げられると良いと考えている。

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	MC ラボ　阿部 清人氏
関係者の説明	仙台市在住で、東日本大震災発生時は防災士の資格を持つラジオアナウンサーとして、被災者への呼びかけを行った。「防災エンスショー」を各地で開催している。
関係者の連絡先	オフィシャル web サイト：http://www.311mc.com/ （「お問合せから」連絡）